千葉大学教育学部研究紀要　第52巻　155～160頁（2004）

単ニとタダ

安　部　朋　世

千葉大学教育学部

A semantic analysis of *tan–ni* and *tada*

Tomoyo ABE

Faculty of Education, Chiba University, Japan

本稿は，「限定」の「とりたて副詞」とされる単ニとタダについて，それぞれが現れる文の特徴を考察することによって，両者の「限定」の仕方を「とりたて」の観点から明らかにするものである。単ニ文とタダ文における文の特徴として新たに指摘できる重要な点は，〈タダは単純な事実報告の文に用いられるが，単ニはそのような文とともに用いられると不自然に感じられる〉ということである。また，単ニを含む文はそれのみで「たいしたものではない」というマイナスのニュアンスが感じられる。これらの文の特徴から，タダと単ニにおいては，前者が〈客観的に捉えられた事態〉を〈前提集合〉として想定することができるのに対し，後者は〈話し手・書き手の主観的尺度に基づく事態〉を〈前提集合〉として想定するという，〈前提集合〉の在り方の違いが指摘できる。

キーワード：単ニ（*tan–ni*），タダ（*tada*），副詞（adverb），
限定（meaning of *tan–ni* and *tada* as “only” or “limited to”），集合（grouping）

1．はじめに

「とりたて」に関する研究については，「だけ」や「さえ」等の「とりたて助詞」を中心に多くの有益な成果が得られている。一方，「とりたて」の機能を有する表現形式としては，タダやマサニといった副詞類も挙げることができるが，管見の限り，「とりたて助詞」に比べ，これら副詞類についての詳細な研究が進められているとはいえない[*1]。「とりたて」全体の体系を明らかにするためには，助詞類だけでなくこれらの副詞類についても研究を進める必要がある。

本稿では，「とりたて」を表すとされる副詞類の考察を進めるために，「とりたて」の機能を有するとされる副詞類の中で，「限定」の意味があるとされる単ニとタダをとりあげて，それぞれの「限定」の在り方を明らかにすることを目的とする。まず，2．節で「限定」の「とりたて副詞」についての先行研究を検討し，3．節で単ニを含む文とタダを含む文の特徴について考察する。4．節では3．節で指摘した特徴をもとに，「とりたて」の観点から単ニとタダの「限定」の仕方の違いについて考える。

2．先行研究の問題点

本稿で取り上げる単ニとタダについては，個々の表現形式についての用法を詳細に記述する森田（1989）等の研究もみられるが，「とりたて」の面からの考察として工藤（1977，2000）の研究が注目される。工藤（1977，2000）では，副詞の中に「とりたて性」を有する「とりたて副詞」を認め，それらについて考察を行っている[*2]。「とりたて」とは，「表現されていない他の同類の物事との範列（範例）的（paradigmatic）な関係の中で問題の語句に対してどのような取り上げ方をするかということ」（工藤2000：180）[*3]であるとし，とりたて副詞の中で「排他的限定」を表すものとして「タダ・単ニ・モッパラ・ヒトエニ」を挙げる。これらの特徴としては，次のことが指摘されている。

① タダや単ニは副助詞の「だけ・のみ・ばかり・しか」などに対応するもので，範列語群との対立の中で，その語句ダケと範囲を限定し，その他を排除するものであること（工藤1977：972）。

(1) 私は何千万とゐる日本人のうちで，タダ貴方だけに，私の過去を物語りたいのです。（工藤1977(1)）[*4]

(2) 私はタダ男女に関係した点についてのみ，さう認めてゐたのです。（工藤1977(2)）

(3) 彼は吉田軍曹がタダ自分のことばかり考えている人間だということをよく知っていた。（工藤1977(3)）

(4) タダ大きな肉の塊としか見えなかった。（工藤1977(4)）

② タダも単ニも，ともに次の例のように，その範囲の限定を否定する用法にも多く用いられること（工藤1977：972）。

(5) しかし丑末が連太郎の書いたものを愛読するのは，タダ其だけの理由からではない。（工藤1977(5)）

(6) 単ニ旅の疲れだけではない。（工藤1977(7)）

③ 「～に過ぎない」とともに用いられる例があるように，対象を「たいしたものではない」とするマイナスの価値評価性をもちやすいこと（工藤1977：973）。

(7) 彼は今単ニ一つの交渉を持って来ただけの話であった。（工藤1977(6)）

(8) 一歩世間に出れば，タダ単ニ貧乏な一人のインテリに過ぎないのではないか，という疑いをさえも感じた。（工藤1977(8)）

④ 副助詞と共存していないが，次のようなモッパラやヒトエニも「排他的限定」に入ると考えられること（工

藤1977：973)。

⑼　どうやら彼はモッパラこの作業のため，こゝへ来てゐるらしい。　（工藤1977⑽）

⑽　今回のことは，ヒトエニ家庭教師であったわたくしの教育の至らなさでございます。（工藤1977⑾）

⑤　(⑴⑺⑼⑽の例を挙げて）文の陳述的なタイプとの照応関係としては，ほぼ叙述文*5専用と考えられること（工藤2000：227)。

⑥　ただし，タダとモッパラは，⑾⑿のように，命令文・依頼文にも使用可能であること（工藤2000：228)。

⑾　いまはタダ自分のことだけを考えていなさい。　（工藤2000）

⑿　しばらくの間，モッパラ調査に従事していて下さい。　（工藤2000）

工藤（1977，2000）は，副詞の中にとりたて性を有するものがあることを指摘し，限定の意味を有する副詞としてタダ・単ニ・モッパラ・ヒトエニを分類して，それらの副詞が現れる文の特徴を記述したものとして重要な研究であるが，とりたて副詞全般についてその機能や特徴を考察することが主眼であるため，とりたて性という面からこれらの副詞がどのような相違点を有するのかについての考察が十分になされてるとはいえない。とりたての研究においては，個々の表現形式がそれぞれどのようなとりたて性を有するのかという面から考察を進める必要がある。本稿では，上記指摘のうち，単ニとタダに関係する①②③⑤の指摘を検討の対象として考察を進めていく。

3．単ニ文とタダ文のそれぞれの特徴

本節では，先行研究で指摘されたことを踏まえながら，単ニを含む文（以下「単ニ文」と呼ぶ）とタダを含む文（以下「タダ文」と呼ぶ）の特徴について整理していく。

まず，工藤（1977，2000）に挙げられたタダや単ニの例文は，いずれも「だけ」や「ばかり」といった限定を表す助詞と共起するものであった。たしかに限定の助詞類と共起する例は多くみられるが，このような共起は必須の現象ではなく，次のように共起しない例文もみられることを確認しておく。

⒀　何万種もの無尽の色彩の隙間から，ふわりふわりと大きな炎が噴きあがっているような思いに包まれて，私は声もなく，タダ黙って鬱蒼とした樹木の配色に見入っておりました。　（宮本輝）*6

⒁「おや，こんなところにも患者がいたのかなあ」と思いながら，私はそのドアについているNo．17という数字を，タダぼんやりと見つめた。（堀辰雄）

⒂　単ニいたずら半分に思いついた手が，人生万般に通ずる機略のモトだ，というのはどういうことであろう。　（司馬遼太郎）

⒃　この瞬間，焼芋を買うときにはいつも真先に十銭を出し，自ら蔵王山と称して校庭で相撲をとるお人好しの中学生は，たしかに一人の愛国者に，単ニ飛行機という媒介物によるごくたわいもない愛国者に変じていた。　（北杜夫）

次に，「タダも単ニもともにその範囲の限定を否定する用法にも多く用いられる」という指摘や，「～に過ぎない」との共起についてであるが，この指摘については，確かにそのような傾向がみられるようである。今回収集した例文についていえば，とくに単ニに関してその傾向が顕著であり，「～ない」という否定形式だけでなく，次のように，「～というよりも」のような比較の表現とともに用いられる例や，「むしろ」とともに用いられる例もみられる。

⒄　信長は単ニ武将というよりも，革命児だったといっていい。　（司馬遼太郎）

⒅「哲学上の観点から考えれば，モオツァルトには，単ニ至上の作品の作家というよりも，更に驚くべきものがある。　（小林秀雄）

⒆　それは単ニ身体の老衰を意味するのでなく，むしろ精神の老熟を意味している。　（三木清）

⒇　それは単ニ情念のうちにあるのでなく，むしろ情念が習慣になっているところにある。　（三木清）

一方，「叙述文と照応する」という指摘については，興味深い現象が指摘できる。

工藤（1977）によると，タダと単ニはともに「範列語群との対立の中で，その語句ダケと範囲を限定し，その他を排除する」（工藤1977：972）とされるが，次のように，タダと単ニを入れかえてもほとんど意味の違いが感じられない例文が観察されることからも，両者は近い意味を有すると考えることができる。

(21) a　この場合もちろん娯楽はタダ他の仕方における生活であって，生活の他のものであるのではない。　（三木清）

b　この場合もちろん娯楽は単ニ他の仕方における生活であって，生活の他のものであるのではない。

(22) a　しかしながらタダ感傷に浸っていては，何一つ深く認識しないで，何一つ独自の感情を持たないでしまわねばならぬであろう。　（三木清）

b　しかしながら単ニ感傷に浸っていては，何一つ深く認識しないで，何一つ独自の感情を持たないでしまわねばならぬであろう。

(23) a　文字を習うのは初めが肝心であり，単ニ字を覚えるだけでなく心構えが大切である。　（山本周五郎）

b　文字を習うのは初めが肝心であり，タダ字を覚えるだけでなく心構えが大切である。

(24) a　信長が奥に入ったのは，単ニ腹が減ったというだけの理由であった。　（司馬遼太郎）

b　信長が奥に入ったのは，タダ腹が減ったというだけの理由であった。

しかし，あらゆる文において互換性があるわけではなく，次のように単ニが不自然になる例が観察されるのである。

(25) a　何万種もの無尽の色彩の隙間から，ふわりふわりと大きな炎が噴きあがっているような思いに包まれて，私は声もなく，タダ黙って鬱蒼とした樹木の配色に見入っておりました。　（⒀再掲）

b？何万種もの無尽の色彩の隙間から，ふわりふわりと大きな炎が噴きあがっているような思いに包まれて，私は声もなく，単ニ黙って鬱蒼とした樹

木の配色に見入っておりました。

(26) a　そういう別途に得た食物がある間は，峻一はできるだけ体力を消耗しまいとタダじっとひたすらに寝ていた。（北杜夫）

b？そういう別途に得た食物がある間は，峻一はできるだけ体力を消耗しまいと単ニじっとひたすらに寝ていた。

(27) a　私はタダ音を立てないようにそっと扉を締めながら再び，夕暮れかけた庭面を見入り出した。（堀辰雄）

b？私は単ニ音を立てないようにそっと扉を締めながら再び，夕暮れかけた庭面を見入り出した。

(28) a「おや，こんなところにも患者がいたのかなあ」と思いながら，私はそのドアについているNo. 17という数字を，タダぼんやりと見つめた。（(14)再掲）

b？「おや，こんなところにも患者がいたのかなあ」と思いながら，私はそのドアについているNo. 17という数字を，単ニぼんやりと見つめた。

上記の例文は，工藤（2000）が「照応関係にある」とする叙述文であると考えられることから，タダや単ニが生ずる条件に外れたものではなく，タダを単ニに置き換えても自然な文として許容されてもよいはずの例文であるが，実際には不自然に感じられる。

タダと単ニを置き換えても不自然に感じられない(21)～(24)と，不自然に感じられる(25)～(28)を比較すると，前者は「…ではなく～だ」「…なのは～だ」「…ならば～だ」といった，他と比較して何らかを説明したり理由を述べたりする文であるが，後者は小説における「外的出来事の提示部分」（工藤1995：195）といわれるような，単純に事実を報告するタイプの文であることに気付く。このことから，〈タダは単純な事実報告の文に用いられるが，同様の文においてタダを単ニに置き換えると不自然に感じられる〉ということができる。

さらに，〈単純な事実報告の文〉ではないタイプの文においてタダと単ニを置き換えた場合も，全く同じ意味に解釈されるわけではなく，次のように想定される文脈が異なる場合があることが指摘できる。(29) a のタダ文や(30) a の単ニ文は，それぞれ(29) b，(30) b のような文脈が想定されるように感じられる[*7]。

(29) a　筋肉痛になったのは，タダ走ったからだ。

b　筋肉痛になったのは，準備運動などをせずに，タダ走ったからだ。

(30) a　筋肉痛になったのは，単ニ走ったからだ。

b　筋肉痛になったのは，ハードトレーニングをした等の理由からではなく，単ニ走ったからだ。

最後に，先行研究における「“～に過ぎない”とともに用いられる例があるように，対象を“たいしたものではない”とするマイナスの価値評価性をもちやすい」という指摘については，次のことが指摘できる。

次の(31)は「～に過ぎない」とともに用いられる単ニの例文である。

(31)　まず光秀のもっている典雅さ，これは勇猛一点張りの織田家の諸将にはない美徳である。将来，織田家の外交官としては最適であろう。外交官といえば，光秀は将軍義昭の信任が厚いだけでなく，京都の公卿，僧侶のあいだにもずいぶんと顔がひろいようだった。これも田舎大名の外交を担当させるにはうってつけの無形財産といっていい。以上だけならば，単ニ信長の使いとしての外交技術者の能力にすぎない。それよりも光秀は織田家の外交そのものを決定できる能力をもっていると信長はにらんだ。（司馬遼太郎）

(31)は，「信長の使いとしての外交技術者」という能力に対し「その程度のたいしたことのない能力である」というマイナスの価値評価が感じられる文である。

このようなマイナスの価値評価は，「～に過ぎない」というマイナスの意味を表す表現形式によって加えられるものだと考えることもできる。しかし，次のように「～に過ぎない」を除いた文においても同様のニュアンスが感じられることから，〈このようなニュアンスは単ニによって生ずるものである〉ということができよう。

(32)　…以上だけならば，単ニ信長の使いとしての外交技術者の能力である。それよりも光秀は織田家の外交そのものを決定できる能力をもっていると信長はにらんだ。

このニュアンスが単ニによって生ずるものであることは，次の例からも確認できる。(33)において当該要素としてとりたてられる内容自体は「至上の作品の作家」という極めて価値評価の高い内容であるが，単ニが伴い「単ニ至上の作品の作家」となると，「そのこと自体は価値評価の高いものであるかもしれないが，それだけのことでしかない」というようなマイナスのニュアンスが生ずるように感じられる。

(33)「哲学上の観点から考えれば，モオツァルトには，単ニ至上の作品の作家というよりも，更に驚くべきものがある。偶然が，これほどまでに，天才を言わば裸形にしてみせた事はなかった。この嘗てはモオツァルトと名付けられ，今日ではイタリイ人が怪物的天才と呼んでいる驚くべき結合に於いて，肉体の占める分量は，能うる限り少かった」（小林秀雄）

よって，単ニの特徴として，〈「～に過ぎない」等の表現によらず，単ニのみによって「その程度のものでありたいしたものではない」といったマイナスのニュアンスが感じられる〉ということが指摘できる。

以上，単ニ文とタダ文との比較におけるそれぞれの文の特徴をまとめると次のようになる。

(34) a　タダや単ニは，先行研究に指摘されるように，ダケ・バカリ等限定を表す助詞と共起する例が多いが，それらの助詞と共起しなければ不自然になるというわけではなく，それらの助詞と共起しない例もみられる。

b　タダや単ニは，先行研究に指摘されるように「～ない」「～に過ぎない」という表現とともに用いられることが多いが，とくに単ニについてその傾向が顕著であり，「～というよりも」「むしろ」といった比較表現とともに用いられる例も多くみられる。

c　タダは〈単純な事実報告の文〉に用いられるが，同様の文においてタダを単ニに置き換えると不自

然に感じられる。

d　〈単純な事実報告の文〉ではない場合にも，タダと単ニを置き換えると想定される文脈が異なる例が存在する。

e　単ニ文は，「～に過ぎない」等のマイナスの表現形式が伴わなくても，「その程度のものでありたいしたものではない」といったマイナスのニュアンスが感じられる。

4．とりたての観点からみた単ニとタダ

とりたてにおける範列性は，具体的には，とりたてを表す表現形式によって示される〈当該要素〉とそれと対比される〈他の要素〉との関係と捉えることができ，〈当該要素〉〈他の要素〉と，それらの要素から構成される〈前提集合〉の在り方による記述によって，それぞれのとりたて方についての詳細な記述が可能となる。例えば，次のダケ文は，「授業の予習にXを読んだ」という〈前提集合〉のもとに，「授業の予習に教科書を読んだ」が当該要素としてとりたてられ，「授業の予習に参考書を読んだ」等の〈他の要素〉が否定される，と説明することができる。

㉟　授業の予習に教科書ダケ読んだ。

このようなとりたての観点からの分析は，とりたての意味を有するとされる「とりたて副詞」においても有効であることが予想される。本節では，3．節で指摘したそれぞれの文の特徴をもとに，単ニとタダについて，〈前提集合〉〈当該要素〉〈他の要素〉といったとりたての観点からの分析を試みることにする。

3．節で指摘したそれぞれの文の特徴として，単ニ文は〈単純な事実報告の文ではなく，「たいしたものではない」というマイナスのニュアンスが感じられる〉のに対し，タダ文は〈単純な事実報告の文の場合も自然な文として解釈される〉という違いがあることが挙げられたが，後者のタダ文の場合，「たいしたものではない」というようなマイナスのニュアンスは必ずしも感じられない。実際に，先に単純な事実報告の文として挙げた㉕から㉘のタダ文をみても，マイナスのニュアンスは感じられない。

よって，単ニ文とタダ文は，文のタイプと文のニュアンスの間に次のような相関関係を有するという点で対比的であるということができる。

㊱　単ニ文：単純な事実報告の文ではなく，「たいしたものではない」というマイナスのニュアンスが感じられる。

タダ文：単純な事実報告の文の場合も自然な文として解釈され，その場合「たいしたものではない」というマイナスのニュアンスは感じられない。

このことは，単ニとタダのそれぞれの〈前提集合〉の在り方が異なることを示していると考えられる。

「事実報告的な文との共起が可能か否か」という違いは，〈タダは「～はしないで…という事実のみがあった」という意味を表し得るのに対し，単ニはそのような意味を表すことができない〉と言い換えることができる。㊲で説明すると，「他のことはせずに“黙る”ことだけして鬱蒼とした樹木の配色に見入っていた」という外的出来事を提示し単純な事実を報告する文の場合，タダは自然であるが単ニは不自然に感じられるということになる。

㊲ a　何万種もの無尽の色彩の隙間から，ふわりふわりと大きな炎が噴きあがっているような思いに包まれて，私は声もなく，タダ黙って鬱蒼とした樹木の配色に見入っておりました。　（㉕の再掲）

b？何万種もの無尽の色彩の隙間から，ふわりふわりと大きな炎が噴きあがっているような思いに包まれて，私は声もなく，単ニ黙って鬱蒼とした樹木の配色に見入っておりました。

このような事実報告を表す文の場合，限定される要素は「事実として存在した事態」という客観的な事柄である。つまり，事実報告的な文におけるタダの〈前提集合〉は，〈事実として想定される事態〉という〈客観的事態〉であり，限定される当該要素は〈実際に事実である事態〉ということになる。

一方，単純な事実報告を表す文の場合に不自然になる単ニ文は，〈話し手・書き手の何らかの主観的表明を表す文〉ということになり，このような文における〈前提集合〉は，〈客観的事態〉ではなく〈話し手・書き手の主観的尺度に基づく集合〉だと考えられる。単ニを含む例文に「～ない」「～に過ぎない」「～というよりも」「（～ではなく/より）むしろ」といった話し手・書き手の何らかの主張を積極的に述べる文が多いことからも，単ニにおける〈前提集合〉が〈話し手・書き手の主観的尺度に基づく集合〉であることが支持されよう。㊳ならば，明智光秀の外交官としての能力を説明する文において，「明智光秀の外交官としての能力」という〈前提集合〉のもとに「信長の使いとしての外交技術者の能力」が〈当該要素〉としてとりたてられ，話し手・書き手の主張として表明されている，ということになる。

㊳　以上だけならば，単ニ信長の使いとしての外交技術者の能力にすぎない。　（㉛の再掲）

単ニを含む文における「たいしたものではない」というマイナスのニュアンスは，上記の指摘，すなわち，単ニによる「限定」が〈話し手・書き手の何らかの主観的表明を表す文〉におけるものであり，〈話し手・書き手の主観的尺度に基づく限定〉であるという〈前提集合〉の在り方の特徴から生ずるものだと考えられる。㊳では，「明智光秀の外交官としての能力は～である」という話し手・書き手の判断・主張を述べる文において，様々な能力が想定される中で「信長の使いとしての外交技術者の能力」が〈当該要素〉として限定されることにより，「他の能力ではなくそれのみである」「その程度でたいしたものではない」といったニュアンスが生ずるのだといえよう。

単ニとタダにこのような〈前提集合〉の違いがあると考えることによって，3．節で指摘した〈単純な事実報告的な文ではない場合にも，タダと単ニを置き換えると想定される文脈が異なる例が存在する〉という現象についても説明が可能となる。次に3．節で指摘した例文を再掲する。

㊴ a　筋肉痛になったのは，タダ走ったからだ。

b　筋肉痛になったのは，準備運動などをせずに，

タダ走ったからだ。　　(㉙の再掲)

㊵ a　筋肉痛になったのは，単ニ走ったからだ。

b　筋肉痛になったのは，ハードトレーニングをした等の理由からではなく，単ニ走ったからだ。

(㉚の再掲)

タダ文において想定される文脈は「“準備運動をして走る”といったことをしないで」であり，単ニ文では「“ハードトレーニング”等の理由ではなくて」というものである。これを〈当該要素〉と〈他の要素〉の関係から捉え直すと，前者のタダ文は，「準備運動をして走る」等の要素が〈他の要素〉として想定され，それが否定されて「(なにもせず) 走る」が〈当該要素〉としてとりたてられており，後者の単ニ文は，「ハードトレーニング」等の要素が〈他の要素〉として想定され，それが否定されて「走る」が〈当該要素〉としてとりたてられている，ということになる。つまり，タダが「何もせずに走った」「準備運動をして走った」のように「どのように走ったか」という「走り方」を問題として〈前提集合〉を想定するのに対し，単ニはそのような〈事象レベル〉の要素を〈前提集合〉とすることはできず，「筋肉痛になった理由として想定されることは何か」という〈理由〉を問題として〈前提集合〉が想定されているのだと考えられるのである。この違いが，㊴と㊵のような違いとして現れているのだと考えられよう。

さて，このような「たいしたものではない」というニュアンスと同様のニュアンスが感じられるものとして，単ニと同じ「限定」の意味を表す「とりたて助詞」を含むダケダ文が挙げられる。ダケダ文とは，文末に「だけ」が位置する次のような文である。

㊶　私はビールを飲んだだけだ。これから美味しいワインや珍しい日本酒が飲めるところなのに，急に帰らなければならないなんて，残念だ。

(安部1999(5) a)

安部（1999）では，ダケダ文の特徴として「発話者の主張・意見の背景となる事象として解釈できること」「“不十分である”といったニュアンスが感じられること」(安部1999：35) を挙げるが，単ニ文とダケダ文で「たいしたものではない」という同様のニュアンスが感じられる文が存在することから，両者が意味的に近いものであることが推測される。

㊷ a　彼の健康法といえば，毎日の食事に気を配るということだけである。

b　彼の健康法といえば，単ニ毎日の食事に気を配るということである。

また，ダケダ文におけるダケの〈前提集合〉は「〈発話者の主観的尺度〉に基づいて設定された，発話者の主観的色付けがなされた集合」(安部1999：37) であることから，〈前提集合〉においても単ニとダケダ文における「だけ」に共通性があるということができる。

ただし，単ニと「だけ」では違いもみられる。次の例をみられたい。

㊸　私はビールを飲んだだけだ。これから美味しいワインや珍しい日本酒が飲めるところなのに，急に帰らなければならないなんて，残念だ。　(㊶の再掲)

㊹　けっきょく，砂地の乾燥は，単ニ水の欠乏のせいなどではなく，むしろ毛管現象による吸引が，蒸発の速度に追いつけないためにおこることらしい。

(安部公房)

㊸のダケダ文は，例えばコンパの進行によって「ビールを飲む＋ワインを飲む＋日本酒を飲む…」と加えられるのではなく，「ビールを飲む」のみに限定される文と解釈される。一方，㊹の単ニ文においては，「～ではなく，むしろ…」とあるように，「水の欠乏」という理由を否定し，かわりに「毛管現象による吸引が，蒸発の速度に追いつけない」ことを理由として挙げていると解釈される。

これらの違いは，単ニと「だけ」における〈当該要素〉と〈他の要素〉との関係の違いと捉えることができよう。すなわち，「だけ」における〈前提集合〉内の要素は，「A＋B…ではなくAのみ」というように，〈前提集合〉内の要素が加算される形で想定されるのに対し，単ニにおいては，「BではなくA」のように，〈当該要素〉と〈他の要素〉が1対1で対比される形で想定されると考えることができるのではないか。㊸㊹の単ニと「だけ」をそれぞれ入れかえると，㊺㊻のように，もとの文の意味とは異なる解釈になり不自然に感じられること，とくに単ニを「だけ」に置き換えた㊻では，「むしろ」の前に述べられている否定される理由が「水の欠乏のみという理由ではなく」という加算的な意味に解釈され，単ニ文の㊹とは異なる解釈に感じられることからも，単ニと「だけ」には上記のような違いが存在すると考えられよう。

㊺? 私は単ニビールを飲んだのだ。これから美味しいワインや珍しい日本酒が飲めるところなのに，急に帰らなければならないなんて，残念だ。

㊻? けっきょく，砂地の乾燥は，水の欠乏のせいだけなどということではなく，むしろ毛管現象による吸引が，蒸発の速度に追いつけないためにおこることらしい。

以上の考察をまとめると次のようになる。

㊼ a　タダ文は〈客観的事象〉を〈前提集合〉として想定できるのに対し，単ニ文はそのような〈前提集合〉は想定できず，〈前提集合〉として〈話し手・書き手による主観的尺度に基づく集合〉を想定する。

b　ダケダ文と単ニ文は，ともに〈話し手・書き手による主観的尺度に基づく前提集合〉を想定する点が共通するが，前者は〈当該要素〉と〈他の要素〉との関係が「〈他の要素〉が加わるのではなく〈当該要素〉に限定する」という加算的な想定の仕方なのに対し，後者は「〈他の要素〉ではなく〈当該要素〉」というように，1対1で対比されるような関係にある点が異なると考えられる。

5．おわりに

本稿では，「とりたて副詞」に分類され「限定」の意味を表すとされる単ニとタダについて，それぞれの文の特徴を新たに指摘し，〈前提集合〉の在り方が異なることを明らかにした。また，単ニ文とダケダ文との比較を通して，それぞれの〈当該要素〉と〈他の要素〉との関

係が異なると考えられることを指摘した。

「とりたて」の「限定」について，それぞれの表現形式がどのような限定の仕方であるのかを明らかにし，「とりたて」の体系を明らかにするためには，それぞれの表現形式を比較しながら詳細に検討を進める必要がある。具体的には，本稿で取り上げた単ニとタダ以外の「限定」の「とりたて副詞」であるモッパラとヒトエニについての検討や，「限定」の「とりたて助詞」とこれら「とりたて副詞」との比較をさらに進めること等が必要である。これらの問題については今後の課題としたい。

注

＊1　工藤（1977，2000）の「とりたて副詞」の研究の他に，小林（1987）における「最初に・特に・おもに」等の「序列副詞」の研究も，副詞に関する「とりたて」の研究として挙げることができるが，小林（1987）は本稿で取り上げる単ニやタダを考察の対象とするものではない。

＊2　工藤（1977）では「限定副詞」と呼び，「文中の特定の対象を，同じ範列に属する他の語とどのような関係にあるかを示しつつ，範列語群の中からとりたてる機能をもつ副詞」と定義している。なお，「排他的限定」にタタ・単ニ・モッパラ・ヒトエニを分類する点は工藤（1977）工藤（2000）ともに同じである。

＊3　「とりたて」の定義については，沼田（1986）ではダケ・サエ等の「とりたて詞」を「文中の種々な要素―これを自者と呼ぶことにする―をとりたて，これに対する他の要素―これを他者と呼ぶことにする―との論理的関係を示す語」と定義し，益岡（1991）では「命題間の範列的な関係を表すもの」を「取り立てのモダリティ」とする，というように，「範列的な関係を示す」という点では一致しているものの，どのレベルでの範列的な関係かに関しては，語なのか命題なのかというように，研究者によって異なりがみられる。本稿では，このようなとりたて全体に関わる問題について論ずる用意はないが，本稿で扱う副詞類については，副詞という性格から考えても今のところ「事態限定」であると考えている。この問題については，タダ・単ニ・モッパラ・ヒトエニという形式だけでなく，タダノや単ナルといった形式も含めて考察する必要があると考える。詳細については今後の課題としたい。

＊4　例文は原文の「ただ・単に・もっぱら・ひとえに」を片仮名にかえ，必要に応じて下線や傍点を省いたり付け加える等の変更を施してある。

＊5　工藤（2000）における「叙述文」とはおおよそ「平叙文」のことをいう。（工藤2000：219）

＊6　以下，例文の文末に（作者名）があるものは，『CD-ROM版新潮文庫の100冊』による。

＊7　㉙ａのタダ文には㉚ｂのような解釈も感じられるが，㉙ｂのような解釈も可能である。しかし，㉚ａの単ニ文に対する㉙ｂのような解釈は相対的に難しいのではないかと思われる。

引用文献

安部朋世（1999）「ダケの位置と限定のあり方―名詞句ダケ文とダケダ文―」『日本語科学』６，国立国語研究所，pp. 32–48

工藤　浩（1977）「限定副詞の機能」『松村明教授還暦記念　国語学と国語史』明治書院，pp. 969–986

工藤　浩（2000）「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法３　モダリティ』岩波書店，pp. 163–234

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房

小林典子（1987）「序列副詞―「最初に」「特に」「おもに」を中心に―」『国語学』151，pp. 96–82

沼田善子（1986）「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社，pp. 105–225

益岡隆志（1991）「取り立ての焦点」『モダリティの文法』くろしお出版，pp. 173–188

森田良行（1989）「ただ」『基礎日本語辞典』角川書店，pp. 651–652